

西淀川記憶あつめ隊

Vol.6

西淀川には中小企業が多く、住宅と工場が混在しています。工場の隣が住宅なんてことは珍しくありません。今回は大野で紙加工工場を営んでいた田中忠雄さんのお話です。

田中 忠雄さん

2010年5月24日
聞き取り

◆通信兵として戦場へ

田中忠雄さんは、豊中市出身の1922年生まれです。15歳に高等小学校を卒業して、歌島にあった軍需工場で働き始めた以来、ずっと西淀川にいるとのことでした。

17歳からは、大阪城にあった大阪陸軍砲兵工廠で高射砲の改造設計をして働いていました。働きながら、塚本にあった大阪電気学校や針中野にあった無線の学校に通い、20歳の終わりには、南方軍第33軍司令部通信兵として、満州やビルマ、雲南省、インドを転戦したそうです。

◆大野で紙加工工場を営む

戦後は、実家が尼崎の立花に移っていたそうですが、母の姉がいた西淀川へ移り住みます。結婚を機に西淀川の「大野」に住んだそうです。関西大学の職員として、18年間ほど施設課で電気関係の仕事をしていました。昭和43年から、一念発起して、大学を辞めて、大野で紙加工工場の経営に乗り出します。キーキボックスなどを作る仕事で、当

時はひっきりなしに仕事の依頼があったそうです。田中さんの工場にはめずらしい加工機械があり、京都や大阪の大手企業が取引先でした。多いときは従業員が10人もいました。周囲は住宅であつたため、騒音には苦労したそうです。防音壁を作ったり、夜7時以降は操業しないようにするなど、工夫をして操業しました。これらの取り組みは、

行政から言われたのではなく、「自分で考えて、周りに迷惑にならないようにやったんやで。」とのことでした。「ほんまは、操業したらドンドン儲かってよかってんけどな。近所づきあいも思ったら、そんな遅い時間まで操業できひん。」と、中小企業と町が共存するための心づかいを聞かせてくれました。

「当時は地域内で金銭の貸し借りもあつたし、地域のつながりが強かってん。」と、顔が見える関係であるからこそその公害防止だったことが分かってきました。また、忠雄さんの奥さんは人づきあいがうまい人で、

「いろんな苦情を処理してくれたのは奥さん。丸く収めてくれたわ。」と笑顔で語ってくれました。

◆奥さんはいつも咳してた

その奥さんが、昭和40年ごろから「しんどい、調子悪い」と言うようになり、その後、公害病認定を受けます。忠雄さんは奥さんが「いつも咳していた」という印象が強いとのことでした。昭和56年に肝硬変、公害による咳、糖尿など、いろいろな病気が併発していた中で、56歳の若さでお亡くなりになりました。

「西淀川から出ていこうなんて考える間がないわ。」という忠雄さん。西淀川の濃密な近所づきあいが垣間見えたヒアリングでした。

林

